



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.32 / Autumn 2014

会長 林 宅男

事務局 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学外国語学部 山本英一研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行【預金種目】当座【店番号】099【口座番号】0130378【口座名】日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

日本語用論学会 Newsletter 第 32 号をお届けします。第 17 回大会の概要についてのお知らせがあります。

★副会長メッセージ

<外行語と語用論>

日本語用論学会 副会長 東森 勲

日本語用論学会の会員の皆さま、副会長の東森勲です。いつもご協力いただき、ありがとうございます。今後とも、一層のご支援よろしくお願ひします。来る 11 月 29 日、30 日は *Pragmatic Impairment* (2007, Cambridge University Press) の著者である Michael Perkins 先生をお招きして、京都ノートルダム女子大学にて大会が開催されますので、多数の会員の参加を期待しています。

さて、最近すこし気になっている日本語が海外でどのように理解されているかを述べてみます。日本に入ってくる外国語は「外来語」で、日本語が海外にでて使用されているものは「外行語」と呼ばれています。(井上史雄(2012)「日本語の世界進出—グーグルでみる外行語」『外来語研究の新展開』東京:おうふう, pp. 97-111)

具体例をみてみると、最近はロンドンでも、ニューヨークでも *Edamame* が売られています。

(塩味でなく) わさび味です。ニューヨークの市場では *Fuji apple* が売られていました。Apple はアメリカでは、通常、小さいサイズで皮ごと食べますが、*Fuji apple* は日本のりんごで、大き

いサイズのりんごを指すようです。*Hibachi* は日本語では冬に炭をいれて用いる暖房器具ですが、アメリカでは卓上コンロで肉など焼いたりするのに用います)(Toshie M. Evans (1997) *A Dictionary of Japanese Loanwords*. Greenwood Press, p.53)。*Satsuma* はイギリスでは、日本の冬みかんを指します。みかんの苗木が薩摩からイギリスに渡ったようです。メキシコではマルちゃんの名詞(インスタントラーメンの名前)から動詞として「簡単にできる、すぐできる」の意味となり、*Transaction was maruchaned.* (素早いお取引でした) のようにも使用されます。スウェーデンでは *Onaka* が飲むヨーグルトの名前で、フィンランドでは、*Geisha* はチョコの名前で、海外に行くと日本語が一人歩きしていると感ずります。*Tsunami* をメタファーとして日本語では使わないが、英語の辞書には次のような用法がのっています: *He described the government's explanation as a tsunami of lies. / Top investors expect a financial tsunami in the next year.* <http://www.macmillandictionary.com/dictionary/british/tsunami>

関連性理論の語彙語用論 (lexical pragmatics) では、このような語の意味の理解の揺れにも語用論が関わり、知識や、語用論的推論により概念がアドホックに決定される (ad hoc concept construction) と説明します。語用論の射程は文やディスコースのような大きな単位のみでなく、語のレベルでも今後、研究が期待されます。

(“Relevance and Lexical Pragmatics” <http://www.phon.ucl.ac.uk/publications/WPL/04papers/wilson.pdf>)

地区研究会コーナー

今年度より日本語用論学会でも地区研究会が開催されるようになりました。そこで、今回は中部地区と関東地区をとりあげて、その活動内容をお知らせいたします。

会員の皆様がお住まいの地域の他の地区研究会の活動につきましましては、事務局 (psj.secretary@gmail.com) までお問い合わせください。

*＜中部地区研究会報告＞

中部地区研究会の第一回を、9月9日に名古屋大学で開催しました。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の林誠氏が、現在サバティカルで日本におられるとのことで、ぜひともこの機会にと考え、今回の講演会が実現しました。講演題目は「会話分析から見た文法研究の新展開」です。

題目にも表れているように、林誠氏は、会話をもとにした文法研究で世界的に知られた研究者です。日本語を対象とするだけでなく、対照会話分析ともいうべき、類型論的な談話研究もされています。

今回の講演ではまず、Sidnell & Enfield 2012 (Current Anthropology, vol. 53) の概要が紹介されました。この論文では「相手が評価を下した件に対して、同意しつつ、その件については自分に"epistemic authority"があることを示す行為」が取り上げられています。そして、さまざまな言語手段（フィンランド語の語順やラオ語の完了小辞など）から得られる付随効果が、結果的に上記の行為を遂行することになる、ということがこの論文で議論されています。以上のようなまとめの後、林氏は、それぞれの言語にどのようなリソースがあり、それらがどのような付随効果をもたらすかを観察することが重要であるとして、日本語の「っけ」による質問、「驚き」を表示しつつ確認を求める「あ」や「なに」といった前置き表現、韓国語の相当表現 아니 (ani) などを取り上げられました。

会話分析からみた文法研究の近年の動向をふまえ、今後の展開の可能性を紹介した大変興味深い内容で、聴衆である私たちにとっては研究のヒントになる示唆に富み、やる気を起こさせるお話でした。

講演会の参加者は35名ほどで、東海地区の研究者と名古屋大学の院生が中心でした。中部地方以外では、関西からの参加者が数名いらっしゃいました。今後の研究会では、さらに多くの（とりわけ地元の）語用論研究者のご参加をお待ちしております。

なお、今回の研究会は名古屋大学大学院応用言語学講座との共催という形を取り、堀江薫氏（名古屋大学）と片岡邦好氏（愛知大学）に企画段階から会場提供まで、多大なご協力をいただきました。（北野浩章 記）

*＜関東地区研究会活動報告＞

関東地区研究会は、本年度については広く参加を呼びかけ、研究会の認知度を高めるため、以下の講演会を行った。

2014年10月25日（土）

講演会 鈴木孝夫氏（慶應義塾大学名誉教授）
（演題：「英語の世界語化はいかに人類を破滅に導くか」）



鈴木氏は必ずしも語用論にとどまる著作、講演をされているわけではないが、その問題意識は語用論と重なるところも少なくない。当日は日本語用論学会会員を含む研究者、大学院生のみならず、高校生、大学生から幅広い年齢層の一般人まで約200名の聴衆が集まり、氏の熱弁に耳を傾けた。多くの著作でも氏が展開している主張に加え、日本人、および日本の研究者が現代においてどのように世界に対して処していくべきかについての指針となり得る持論を展開された。（幹事：井上逸兵 記）

なお、九州、四国、中国地区につきましましては、当面、試行的に九州北部の会員を中心に研究会を開催し、地区同士連絡を取りながら、活動を活性化していく予定です。その他の地区につきましても、それぞれ企画を検討中です。（事務局長 記）

★ 第 17 回大会のお知らせ

2014 年度の第 17 回大会は、以下のとおり開催されます。

■2014 年 11 月 29 日(土)～30 日(日)

■京都ノートルダム女子大学・新ユージニア館
〒606-0847 京都市左京区鴨南野々神町 1 番地
大学ウェブサイト:

<http://www.notredame.ac.jp/>

アクセス情報:

<http://www.notredame.ac.jp/accessmap.html>

(1) JR「京都駅」から(地下鉄乗車時間 16 分)
地下鉄烏丸線「国際会館」行き乗車、「北山駅」
下車、1 番出口から東へ徒歩 7 分

(2) 阪急「烏丸駅」から(地下鉄乗車時間 10 分)
地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗り換え(地下鉄「四条駅」)、「北山駅」下車、1 番出口から
東へ徒歩 7 分

■参加費: 2,000 円(会員)、3,000 円(非会員)
(昨年度の Proceedings 代、Abstract 集代金などを
含む)。

■主なプログラム (詳しくは同封のプログラム
をご覧ください)

《11 月 29 日(土)》

9:30 受付開始

10:00～11:40 ワークショップ (E401)

13:00～13:20 会員総会 (ND ホール)

13:30～16:05 研究発表(英語発表 2 会場・日本語
発表 3 会場) (E401～405)

16:15～17:45 基調講演 (ND ホール)

講師: Michael Perkins 教授 (Sheffield 大学)

司会: 久保進 (松山大学)

Keynote Speech “Explaining Pragmatic Impairment:
Finding the Best Fit between Pragmatic Theory and
Clinical Data,” Professor Michael Perkins
(University of Sheffield) (Chair: Susumu Kubo /
Matsuyama University)

18:00～20:00 懇親会 (カフェテリア)

(一般 4000 円, 学生 3000 円。参加費は大会
受付にてお支払いください)

《11 月 30 日(日)》

9:00 受付開始

9:30～12:40 研究発表(英語発表 2 会場/日本語
発表 3 会場) (E401～405)

11:25～12:25 (A) ポスター発表 (大講義室)

12:25～13:25 (B) ポスター発表 (大講義室)

13:30～16:00 シンポジウム “Clinical Discourse”
(ND ホール)

Topic: What kind of contribution linguistic
pragmatics can do to the studies of interaction in
clinical and medical fields?

Chair: Susumu Kubo (Matsuyama University)

Speakers:

Teruko Ueda (Aomori Public University)

Manabu Ooi (Kanazawa University)

Sumi Kato (Aomori Chuo Gakuin University)

Commentators

Reiko Hayashi (Konan Women's University)

Tomoko Matsui (Tokyo Gakugei University)

Michael Perkins (University of Sheffield)

16:00～ 閉会式 (ND ホール)

■研究発表とワークショップの詳細、また各発表
の要約についてはプログラムと学会
HP をご覧ください。書店展示(研究社・ひつじ書
房・開拓社・くろしお出版・大阪洋書)もありま
す。

■受付について

会員については会員番号による受付をいたしま
す。Newsletter の宛名シールに会員番号を明記し
ています。その番号をお持ちください。

■当日の昼食

お弁当は手配しておりません。学内食堂をご利
用ください。ただし、臨時営業のため簡易メ
ニューでの営業となりますので、ご了承ください
。なお、会場外にも、数軒のお店があります。

■ホテルの紹介

学会ではホテルの紹介はいたしておりません。
各自でご手配ください。

《事務局より》

★ 会費納入のお願い

■今年度の会費を、11 月末までにお払いくださ
い。

■昨年度までの会費が未納の方には、連絡用紙を
同封しております。学会の会計をご理解の上、
未納の分も併せてお払いください。行き違いが
ございました場合は、ご容赦ください。

■会費の未納が 2 年以上になりますと、会員の
資格を失うことになっています。

■振替用紙が同封されていない方は、すでに今年
度の会費が納入済みの方です。ご協力ありがた
うございます。

■年会費は、一般会員：5,000 円、学生会員：4,000 円、団体会員：6,000 円です。(正しい額でのご入金にご協力お願いいたします。)

■会費の振込先は以下の通りです。近年、所属機関のお名前のみでご入金される方が増えてきました。会員名の確認に手間取りますので、必ず会員ご自身のお名前をお書き添えください。

1. 同封の振替用紙で支払う場合：

郵便振替口座：00900-3-130378 (ゆうちょ銀行)

口座名：日本語用論学会

このほか、次の 2・3 の振込先もご利用いただけます。

2. 他銀行の ATM から振り込む場合：

ゆうちょ銀行 支店名：099 当座 口座番号：0130378 口座名：日本語用論学会 (ただし、振り込み手数料がかかります。ゆうちょ銀行の ATM から振り込みが可能です)

3. ATM からの銀行振り込み：三井住友銀行 学園前 支店 普通預金 店番号 546 口座番号 3755278 日本語用論学会 長友俊一郎 (ただし、他銀行からは振り込み手数料がかかります)

(お願い) 2 の場合は、事務局会計には、カタカナのお名前しか通知されません。また 3 の場合は、通常は通知がありません。お手数ですが、振り込みと同時に、事務局会計 (長友俊一郎：psj.treasurer_at_gmail.com) にお支払の年度とお名前、会員番号、所属、住所 (また、所属、住所に変更がある場合も同様) をメールでお知らせいただければ幸いです。

■業者委託による ID・パスワードを利用して、ウェブページよりクレジットカードを利用した振込も可能です。

★ Pre-conference 講演会のご案内

年次大会に先立ち、下記の通り、Michael Perkins 教授による Pre-conference 講演会を開催いたします。会員の皆さまには、奮ってのご参加をお待ちしております。

日時：2014 年 11 月 28 日 (金) 15:00-16:30

場所：龍谷大学大宮キャンパス清和館 3F ホール (JR 京都駅から徒歩 10 分)

講師：Michael Perkins

演題：How Pragmatics can Go Wrong: An Overview of Clinical Pragmatics

概要：There appears to be no area of human communication that is immune to breakdown. I therefore begin this lecture by locating clinical pragmatics within the broader discipline of clinical linguistics, a sub-discipline of linguistics which emerged during the 1970s. I then consider the wide

range of communicative behaviours which have been regarded as manifestations of pragmatic impairment, and show how these have been linked to various underlying neurological, cognitive and physiological pathologies. I will suggest that pragmatic impairment is not just one condition but many, and argue that in order to be clinically useful, approaches to pragmatic impairment should: a) be broad-based, b) be centered on the communicating dyad rather than just the individual, and c) take into account complex interactions such as compensatory adaptation both within and between individuals.

★ 特別講演会のご案内

青山学院大学 (総合研究所プロジェクト) が主催で、スタンフォード大学名誉教授エリザベス・トラウゴット先生の特別講演会が下記の通り開催されます。本学会との共催といたしましたので、会員の皆様には、万障お繰り合わせの上、ご参加いただけたらと思います。

日時：2014 年 12 月 7 日 (日) 14:30-16:30

場所：青山学院大学 1 7 号館 6 階本多記念国際会議場 (JR 渋谷駅より徒歩 12 分、メトロ表参道駅より徒歩 9 分)

講師：Elizabeth Closs Traugott

演題：The pivotal role of linguistic context in constructional change

概要：Context has been a central notion in linguistics since Verner (1875) showed that sound change may depend on linguistic distribution and is not exceptionless as the neogrammarians then thought.

As linguists embraced pragmatics, discourse analysis, and sociocultural factors, an attempt was made to distinguish “context” (“external”, material setting) from “co-text” (“internal”, verbal, linguistic distribution (see Catford 1965). However, the distinction has proved hard to maintain, and many linguists now simply refer to “context” when referring to “linguistic/verbal context”.

I argue that linguistic context has a pivotal role in usage. I argue that linguistic context has a pivotal role in usage in usage-based constructionalist perspective on grammatical change (Diewald and Smirnova 2012, Traugott Trousdale 2013). Extensive work on context in grammaticalization has been done in an attempt to theorize Bybee, Perkins, and Pagliuca’s (1994) statement: “Everything that happens to the meaning of a gram [‘grammatical item’] happens because of the contexts in which it is used”. In work on grammaticalization researchers usually focus either on meaning or on form. In construction grammar (e.g. Croft 2001, Goldberg 2006), both are of equal importance since a construction is a form-meaning pairing. Therefore the role of context I change needs to be rethought. In particular, a distinction needs to

be made between contexts that, together with language processing, may enable onset of constructionalization (Diewal 2002 calls these “critical” contexts) and contextual changes after constructionalization.

Examples are drawn from the development of i) a *shred of* in its quantifier use (e.g. *not a shred of evidence* ‘not any’, Brems 2011), ii) *all but* in its approximator use (e.g. *she all but fell down* ‘almost’, De Smet 2012), and iii) *IT*-clefts (e.g. *It was John who fell*, Patten 2012).

《新刊・近刊案内》

(運営委員会委員をはじめとする会員諸氏からの情報をもとに作成しました。紹介文は出版社によるものを利用しています。)

■『発話解釈の語用論』大津隆広著 九州大学出版会 (3,800円＋税)

本書は、関連性理論に基づく語用論の研究書である。前半では、その基本的な概念や枠組みを整理した上で、語用論における重要な課題である会話の含意や発話行為などを関連性理論の視点から捉え直している。本書の後半はその事例研究である。英語の談話連結語 *after all* や日本語の接続表現「だって」の多様な用法について、符号化された手続きを定義することでその一義的説明を行っている。一方、文法化の議論においても関連性理論の貢献は少なくない。18世紀と現代の2つのコーパスの比較に基づく *after all* の文法化の議論では、意味保持の観点から、その主観的(および間主観的)意味への意味変化について一義的説明を行っている。さらに、照応プロセスは、メタ表示に基づく認知能力に支えられたものであると指摘し、動詞句照応表現に符号化された手続き、照応表現と直示表現の手続きの違いについても言及している。

■『日本語の配慮表現の多様性』野田尚史・高山善行・小林隆編 くろしお出版 (3,700円＋税)

この本は、近年、日本語研究の中で注目されるようになってきている「配慮表現」を多角的に研究したものである。古代語から現代語までの歴史的変化と、現代の日本各地に見られる地理的・社会的変異という主に2つの観点から、専門分野が異なる日本語研究者16名が時間をかけて共同研究を行い、日本語の配慮表現の多様性を追究した成果である。(執筆者：野田尚史、高山善行、小林隆、小柳智一、藤原浩史、森野崇、森山由紀子、米田達郎、青木博史、福田嘉一郎、

木村義之、岸江信介、尾崎喜光、西尾純二、日高水穂、三宅和子)

■『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為』金水敏・高田博行・椎名美智編 ひつじ書房 (3,600円＋税)

時代や文化の異なる社会で、人は場面に応じて言葉をどう使い分けてきたのか? その言葉の使用法は時代と共にどう変わってきたのか? この問いに答えるべく本書では、文法化と待遇表現について論じたあと、人を取り調べる、人を説得する、人に伝えるという観点から英語史・日本語史・ドイツ語史におけるトピックを掘り起こし、新たな研究へと誘う。(執筆者：小野寺典子、福元広二、森山由紀子、椎名美智、高田博行、諸星美智直、片見彰夫、中安美奈子、芹澤円、森勇太、高木和子)

■ *Encyclopedia of Humor Studies. 2 vols.* Salvatore Attardo 編 SAGE Publications.

The *Encyclopedia of Humor Studies* explores the concept of humor in history and modern society in the United States and internationally. This work's scope encompasses the humor of children, adults, and even nonhuman primates throughout the ages, from crude jokes and simple slapstick to sophisticated word play and ironic parody and satire. As an academic social history, it includes the perspectives of a wide range of disciplines, including sociology, child development, social psychology, life style history, communication, and entertainment media. Readers will develop an understanding of the importance of humor as it has developed globally throughout history and appreciate its effects on child and adult development, especially in the areas of health, creativity, social development, and imagination. This two-volume set is available in both print and electronic formats.

■ *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change.* Kate Beeching and Ulrich Detges 編 Brill.

A basic property of human language is that it unfolds in time; the left and right margin of discourse units do not behave in a symmetrical fashion. The working hypothesis of this volume is that discourse elements at the left periphery have mainly subjective and discourse-structuring functions, whereas at the right periphery, such elements play an intersubjective or modalising role. However, the picture that emerges from the different contributions to this volume is far

more complex. While it seems clear that the working hypothesis cannot be upheld in a “strong” way, most of the chapters – especially those based on corpus data – show that an asymmetry between left and right periphery does exist and that it is a matter of frequency. Contributors: Kate Beeching, Liesbeth Degand, Ulrich Detges, Chiara Ghezzi, Stephanie H. Kim, Piera Molinelli, Noriko Onodera, Sung-Ock S. Sohn, Elizabeth Traugott, Richard Waltereit, Yu-Fang Wang, Tak-Sum Wong, Foong Ha Yap, and Ying Yang.

■ *Usage-based Approaches to Japanese Grammar: Towards the Understanding of Human Language.*
Kaori Kabata and Tsuyoshi Ono 編 John Benjamins.

This volume brings together papers that take usage-based approaches to study the nature of human language, with a focus on the grammar of Japanese. The 12 chapters provide a rich array of data and methodologies, with topics ranging from phonology, modality, and grammatical morphemes, to sentential construction and discourse-level phenomena such as turn-taking, speech register, and language change. As a whole, they demonstrate that usage-based linguistics illuminates various phenomena in the language that could not have been well accounted for by resorting solely to a formal theory such as the Universal-Grammar-based approach. Reflecting theoretical, methodological, and technological advancements made in and outside the field of cognitive-functional linguistics in recent years, the papers contained in this volume, both individually and collectively, have significant implications towards linguistics in general and Japanese linguistics in particular, as we as Japanese language teaching. (執筆者：大野剛、鈴木亮子、マクグロイン花岡直美、ジョンソン由紀、岩崎勝一、新里瑠美子、堀江薫、ハイコ・ナロック、ティモシー・J・バンス、白井恭弘、下野香織、森純子、林誠、松本善子、岡本茂子)

■ 広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思っておりますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報をお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written

in your native language are especially welcome. Email Hiro KITANO (北野浩章) at kitano@aecc.aichi-edu.ac.jp.

<<編集後記>>

- * 秋も深まる中、ようやく Newsletter 32号ができました。新しく、地区研究集会の模様を掲載致しました。各地域での学会活動がますます盛んになることを期待しております。また、<<新刊・近刊案内>>で英語での呼びかけを試みました。
- * いよいよ今月末には日本語用論学会第17回大会が京都で開催されます。きっと紅葉も美しい頃でしょう。会場で参加者の皆様とお会い出来るのを楽しみにしております。(鈴木光代 記)

[広報委員]

- * 委員長：田中廣明
- * Newsletter 編集担当：鈴木光代、北野浩章、堀田秀吾